

H 2 8 年度Ⅱ期 グループ企画 1

	氏名	渡航先	国・地域	渡航先機関での 受入期間
1	◎F. K	Asian Medical Student's Association of Taiwan(AMSA Taiwan),National Yang Ming Univeristy	台湾	H29/3/9-H29/3/16
2	M. Y			
3	O. S			
4	P. J			H29/3/9-H29/3/13
5	M. K			H29/3/9-H29/3/16
6	S. S			

◎グループ代表

平成28年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 4 回生

F.K

平成28年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書に添付する「今回の海外活動により得られた成果・感想等」を以下にご報告します。

3月9日

12時10分に台北の桃園空港着後、北投駅から徒歩5分ほどの on my way ホステルに移動し荷物をおきました。

午後 INTRODUCTION

一駅離れた新北投を見て回りました。公営の図書館があり、建築的に非常に価値あるものであるだけでなく窓を非常に大きく作ることによって採光性を高め、内部は控えめな灯のみにすることで環境にも配慮した機能的なつくりになっていました。また近辺には温泉博物館があり、日本占領時代の建築物でした。休憩所としての畳があり、昔の日本の温泉施設のような小さな映画館などもあって非常に日本の色彩が強く出ている一方、浴場自体はプールのように長辺が9メートル、深さも1.5メートルを超えるなど通常日本の温泉には見られない特徴もありました。中には日本統治時代の資料なども存在し、前評判として聞いていた「台湾は親日国である」という前評判は正しいのか、また何故なのかにとっても興味を持ちました。

夜 WELCOME PARTY

台湾の学生たちによる歓迎会で台湾の料理を頂いた後、それぞれの文化を紹介しあう cultural boose にて日本からは四季の紹介、およびサブカルチャーの紹介を行いました。日本の文化は台湾で非常に人気があるようですべて興味をもってもらえました。台湾の学生は歓迎会やパーティーに慣れているようで様々なゲームを考案し、また楽しませる術を知っているようでした。その理由の一つは恐らく私たちが滞在した陽明大学がほぼ全寮制を取っているからだと思います。非常に縦の関係、横の関係が強く新入

生歓迎時には 2 泊 3 日のオリエンテーション、また友達の誕生日は必ずその人の部屋で祝うなどのイベントがあり、その都度様々な企画を作り出しているようで、日本の大学ではあまりない、人も自分も楽しむような企画を作るのに長けており、私たちも学ばなければならぬと感じました。

3月10日

午前 HOSPITAL VISITING (がんセンター、中でも特に緩和医療部門)

目的：ここでは台湾での **academic program** 全体を通しての目標とこのプログラムに参加するにおいて特に気を付けたことの大きく二つに分けます。

まず全体を通しての目標です。1つは、日本以外の医学部の講義の質や方法、およびそれに対する海外の医学部生の姿勢を知ることです。これは日本にいたるだけでは分かりませんが、将来必ず海外の医師と同じ土俵の上で競わなければならないときが来るはずで、その為に海外の医学部の1つとして台湾の医学部の学生や講義の質や内容、レベルを知ることが重要であると考えていました。

もう1つは英語の講義の中で話すこと、聞くこと、書くこと全てにおいて私の英語がどれだけ通用するかを知ることでした。以上2つは講義すべてに共通する目的でした。4回生の臨床の講義も終わり、CBT も終わった現在医学の机上の知識は少々あると思っていましたので、先生のおっしゃることを理解しそれに対する有意義な質問し納得のいく質疑応答をすることまでを目標としていました。

この講義だけの目的としましては、緩和医療という分野自体を大阪大学の授業では集中的に取り扱うということがなかったもので、とても興味をもっており、純粋に知らないことばかりであり、知識を少しでも多く吸収したいと思っていました。また緩和医療は他の医療行為とは異なり根本的な治療はほとんど追及しない中でどういった意義、手法、考えを持って医師が携わっているのかに大きな関心があり、それについての話を聞くことも目的としていました。

内容：はじめ病院についてのイントロダクションがあり、大きく病院を見て回りました。そこでは、その病院では患者の 7 割ががん患者であること、台湾の中では非常に先進的で人気のある病院であること、通院治療の患者で抗がん剤の注射投薬は午前と午後 2 クール行っていること、また非常に興味深かったのが乳がん患者は入院以外のプロセスはすべて 1 室で行われ、外から見られないなどプライバシーに配慮したような構造になっていました。その後緩和医療部門の先生方による説明、ディスカッションがあり、非常に有意義でした。

成果及び今後の抱負：緩和医療は様々な医師が共同で行っており、それぞれの医師は各々別の診療科に属しており、医師によってはかなりの負担になりうることを知りました。その中でも患者に少しでも「良い死に方を」というコンセプトのもと様々な努力をしていることを聞くことができました。終末期の患者は最上階に移され、家族と過ごす時間が増えるようになり、死期が近く（1時間から24時間程度）なるとほかの部屋に移されます。これは他の患者は周りで死者が出ると非常に動揺するためです。私は日本のホスピスを見たことがないので比較まではできなかつたのが最大の心残りでした。やはり様々なことに興味を持って学生のうちからいろいろなところを見ると、違う国と比較ができ、質問の幅も広がりディスカッションも深くなり、より有益な情報を得られたはずだと痛感しました。

午後 NGO VISITING

目的：NGOとは一般に非常に様々な種類がありますが、その中でも医療の分野で何をしているのか、どこまで周囲（患者、医師、政府、環境など）に対して影響を与えることができるのかに興味がありました。

内容：訪れたNGOの活動内容を伺いました

成果及び今後の抱負：非常に漠然とした話で建前が多く、本音まで聞くことができたとは言えませんでした。訪れたNGOの存在は非常に意義深いものだと感じました。その存在意義は難病認定を国家に認めさせることで、資金源は主に患者の家族のようです。産まれる前から遺伝子やそのほか所見、検査から難病を診断し家族に分娩後の準備をさせることが大切でその啓蒙や研究活動の一端を担い、また生まれた後も治療には高額の治療費がかかるため政府からの援助を受けることができるようにしているようです。特に映画やテレビ番組を用いた啓蒙活動は大規模だと感じたので、日本でもそういったNGOや活動があるのか調べてみようと思いました。またNGOはそういった大きな役割を担えるとは思っていなかったので大きな発見でした。

3月11日、12日 JIUFEN(九分) VISIT

他、金の採掘場、寺院をめぐるしました。

3月13日

午前 LAB VISITING

目的：一つの研究室の研究を見るわけなので、それほど日本とは違わないと思っていました。またCBTの勉強もした今、いかに説明を理解し意義深い質問をするかを目的と

していました。

内容：イメージング技術を用いて脳の神経一本一本の活動を定量的に把握して計測するというもので、その中でも海馬に焦点を当てていました。マウスを用い、ある決まった場所の中で自由に動き回らせる中で、物体を置くのと置かないのではマウスの行動、およびその海馬の神経細胞の動きに違いが出るかに焦点をあてています。

成果と今後の抱負：周りからも有意義な質問がいくつも出ました。そのいくつかを述べます。

日本では男性の方が道の覚えがいいと言われるがマウスではどうなのか、また神経細胞レベルではどう違うのか。

なぜ海馬だけなのか。記憶には他もかかわっているのではないか。

視覚情報が主な入力なのか。

また最も印象的だったのが、このイメージングには 2 光子顕微鏡を用いますが、これは非常に繊細で少しでもマウスの頭部が動くと途端に見えなくなるので、これを補正するためにマウスが走る台が動くような仕掛けになっていることです。大阪大学の免疫学の教室でもイメージングをされている石井優先生がおられますが、今回の研究室はより体の一部（脳、その中でも海馬）に特化した研究をされておりとても印象に残りました。

午後 MEDICAL THEATER

目的：台湾の学生が普段どのように授業を受けているかを知る良い機会でしたので、特に大阪大学の医学部の講義と何が違うのか、そしてもし台湾の講義の方が優れている点が見つかれば私達はそれに追いつくためにどうしなければならないのかを考えることが目的でした。

内容：台湾の学生は時折受けている授業らしく、映画をときどき止めてはそれに関するディスカッションをするといった非常に興味深いものでした。学生が映画や教材を準備してくれましたが、日本の医療ドラマである医龍を用いて医療倫理について考えるというものでした。

成果と今後の抱負：まず、台湾では一学年 130 人を 10 グループに分けて少数による授業が行われており、それがこのようなディスカッションを可能にするのだと思います。ただ映画を用いて興味を惹くこと、また少人数制なのでそれぞれの参加度が非常に重要視されることなどから非常に白熱した議論になり、普段の授業でもそうなのであろうと感じました。日本の授業では小学校教育から大学教育に至るまで自分から進んで

意見を言う機会はありません。また日本人は控えめであることが美德とされる風潮がいまだにあります。従って大学から、もしくは社会人になってからいきなり自分で考えを相手に伝えなければならないと言われても難しいと思います。従ってできれば教育課程の早いうちから意見を述べる場を設けること、意見を述べることは大切なことだと教えることが必要だと思います。そして大学教育でもプログラムとしてそういった授業を盛り込むとよいのではないかと思います。一人の教授が仕切る授業では真似事はできても、系統だった教育には結びつきません。その理由はその教授はそれに時間を割くよりも、自分が与えられた科目を教えなければならないからです。また、少人数での授業が可能になるだけの人的資源が台湾にはあります。私たちが在籍した陽明大学は国立であり（私立ではない）、またそのチューターは必ずしも医師免許を持った教員でなくても代用できると思いますので、大阪大学でも確保は可能かと思います。しかし教育プログラムのせいにしても意味がなく、私たちはそういった教育を受けずに来ているのでどうにかして他国の医学生に負けないよう努力しなければなりません。従って私はこういった海外に行く機会を得てなるべく多く、また有意義に海外に行き、現地の医学生と交流して刺激を受けることが必要だと思います。

3月14日

MRT trip

台湾の予備校訪問、二二八事件記念館、台北 101

3月15日

午前、午後 Panel Discussion, PBL

目的：共に台湾の学生が普段どういった授業を受けているのかを体験形式で学習するもので特に PBL は 3, 4 回生の授業の中核をなすものだと聞いており、国立陽明大学が台湾で初めてこの学習システムを導入したと聞いていたので非常に興味を持っていました。

内容：患者の一連の訴えや経過、それに対する検査などの書類を読み学生グループでそれぞれ、例えばこの検査結果からは何が考えられるのか、この主訴からは何が考えられるのかなどを学生主体で考え、少しずつ疾患の鑑別・確定につなげるというものです。これにもチューターが各グループに一人ずつ付き学生同士の議論が横筋にそれ始めたら訂正する役割を持つようです。

成果と今後の抱負：それぞれの要素一つ一つで考えられる要素をまとめていく授業であり、非常に時間のかかる作業で実際にやろうと思えば間違いなく学生には大きな負担になると思います。それも踏まえてよい勉強方法かどうかはわかりません。しかし少な

くとも臨床医になってから非常に重要な考え方のプロセスを具現化したものであることは間違いないと感じました。

3月16日 on my way hostel を後にして台北桃園空港より関西国際空港に向けて出発

台湾での滞在スケジュールは以上になりますが、そのほかいくつか文化的な違いなども含めてご報告したいと思います。

医学部のシステムの違い：日本と台湾の両医学部における授業システムの違いを述べたいと思います。台湾では学生参加型の授業が非常に多く、それは一部の授業における少人数制の授業体系の導入によるものだと思います。学生参加型ではある程度自分で勉強しないと発言できませんし、発言することで記憶に定着するということがあります。また、台湾では教材は英語らしく、非常に皆英語に慣れているように感じました。同じ島国なのに日本の医学生よりもはるかに英語を話せるのは海外に行く機会が多いからでもないのに非常に素晴らしいことだと感じました。

日本人と台湾人の違い：台湾人は多くの人が非常に気配りのできる人たちばかりで、その一つの理由が台湾ではほとんど全員が寮に入っていることがあげられるかもしれません。またもう一つの理由は寮にほかの国からの学生と一緒に住まわせてあげていることが理由として挙げられるとおもいます。そして、できるだけこちらの希望に添えるようにしてくれるという体力と根気があります。従ってそのように様々な機会を利用して外国の学生を受け入れることで自身の英語力も磨いているのだと感じました。また、外国の人と仲良くなるにはやはり相手の文化をよく知ろうとする姿勢が大切だと感じました。相手の言語で挨拶、例えばおはようございます、をどのように言うのかを尋ねてそれを毎朝言う、というだけでもかなり外国で相手と近づけるよい方法だと思いました。また、アメリカ人は生まれながらにしてアメリカにいるから英語を勉強しなくても良いから羨ましい、などと言っていた私としては台湾人のように自国内だけでかなりレベルの高い英語力を身につける姿勢に感動してやはり英語をもっと勉強しようと思いました。

相手が一生懸命立てて案内してくれていることに一般的にはではなく私個人がもっと敬意を表さなければならなかったと感じました。台湾人は私たちより回生が下でしたので授業のレベルとしては少し低めでしたが、それでも英語に強くない私達日本人にとっては医学的知識以外に英語力、英単語力という点でも学ぶべきところがたくさんありました。どれも重要なことなのにもかかわらず、授業が簡単だったとか、あそこよりもっと違う

あそこに行きたかったとかいちいち思うのではなく、全て留学の重要な1ピースだと考えることが必要だと思いました。それが案内してくれた相手に対する敬意にもなり、友好的な関係を築くには必要だと思いました。

最後になりますが、こういった色々な経験ができる機会を頂いた岸本忠三先生、有難うございました。やはり、日本国内、その中でも大阪大学内という狭い世界では将来競い合うべき世界のレベルを知ることができず、刺激を受けることもできません。またこれからの時代では競うだけでなくいかに海外の人とうまく人付き合いができるかは非常に大きくその人の臨床・研究の出来を左右すると思います。そういった力を学部生のうちから養う機会を頂いたことを生かしてこれから一層励みたいと思います。

平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 4 年

M.Y

活動の目的・内容・成果・今後の抱負

目的：台湾の文化・宗教、医療について学び、現地の学生との交流を深める。

文化・宗教について：台湾は日本の文化の影響を大きく受けている。小説、TV ドラマ、漫画、アニメ、ゆるキャラに至るまで、台湾の人々は非常に日本の文化を知っており、その解釈について話し合うことができた。仏教・道教が主流だが、土着の信仰も残っている。九份では寺を回ることができたが、古い寺を新しい寺が囲うものであった。

歴史について：台湾は旧日本軍の統治下にあった。第二次大戦後、それまであった自治への気概が大陸の政治に対する反発をきっかけに 228 事件となった。われわれは 228 事件記念館を訪問し、日本軍統治下の状況から現在に至るまでの厳しい闘いを知った。

医学教育について：今回訪問した国立の医科大学である NYMU では 3 年度から臨床教育を行う。これは通常の講義以外に、PBL (project based lecture) という講義と相互補完する形で行われる。PBL では患者の状態が与えられ、そこから疾患に結びつく重要な症状を考え、疾患をリストアップし、全体をマインドマップ形式でまとめていた。NYMU の PBL は台湾で一番の質であるという。通常 PBL は講義と考察で非常に時間がかかるので、われわれは学生が用意した日本のドラマを基にした資料でディスカッションをした。PBL は非常に有意義な講義形式であると思った。PBL はカナダで始まり、現在、多くの国で必要不可欠なものとなっている。

medical theater では wit という海外の末期がん患者の映画、医龍について、その内容が医学的に正しいかを討論し、より医学的に良くするためにはどうしたらいいかを演じた。

医学研究について：ドイツで学位、アメリカでポストドクを経験した研究者の話を聞くことができた。カルシウムイオンを検出するための発光するチャンネルの開発であった。非常にレベルが高く、研究室は新しかったが、設備が整っており、研究しやすい環境に感じられた。

病院について：ガンホスピスでは、日帰りのケアが充実しており、ベッドを置いて入院するという形式をなるべく摂らないように考慮されていた。また、患者と医師が可能な限り会わないように建物が設計されており、患者同士や家族との時間を大切にする気持ちが感じられた。

今後の抱負など：台湾の文化や医学部生の実態を知ることができた。台湾の大学では学生寮であることが多い。また、一学年の中にも少人数グループがあり、それぞれに担当する教員がついている。上の学年のグループとの交流もある。これらの交流が、阪大にはないということ話をすると、どのようにして厳しい医学部生活を乗り切るのか？と怪訝な表情をされた。確かに、学生同士の交流は阪大では希薄かもしれない。今後より一層の交流を心がけ、良い医師を目指していきたいと思う。

本海外活動は岸本国際交流奨学金の支援を受けました。非常に有意義な留学を行うことができました。ご支援ありがとうございました。

スケジュール一覧表

1日目

台湾着

キャンパスツアーとウェルカムパーティーを行った。

2日目

ガンホスピスの訪問をした。

希少疾患のNGOの訪問をした。

友人の紹介で国立台湾大学の学生と交流をした。

3・4日目

九份の観光を行った。

5日目

研究室見学を行った。

Medical theaterの講義を受けた。

6日目

中正記念堂や台北101を訪れた。

7日目

日本と台湾の医学教育・医療制度について討論を行った。

PBLの講義を受けた。

フェアエルパーティーを行った。

8日目

台湾発

平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 4年

O. S

1. 目的

- ① 台湾の学生と交流をすることで、台湾の医療制度や学校制度の良いところを知り、これからの学習に取り入れる。
- ② 台湾の医師の働き方を見学し、日本の医療を客観的にみる。
- ③ 台湾の文化について知る。

2. 内容

平成 29 年 3 月 9~16 日(8 日間) 台湾陽明大学医学部を見学

3 月 9 日 陽明大学のキャンパスを見学

3 月 10 日 Koo Foundation Sun Yat-Sen Cancer Center(KF-SYSCC)で緩和医療を学ぶ
Taiwan Foundation For Rare Disorders(TFRD)でインタビュー

3 月 11,12 日 九份を観光

3 月 13 日 研究室(海馬のニューロンのつながりを研究している)を見学
インフォームドコンセントに関する医療ドラマを鑑賞してディスカッション

3 月 14 日 台北市内を散策

3 月 15 日 症例ディスカッション
Problem-based learning(PBL)の実践

3 月 16 日 帰国

KF-SYSCC

この Cancer Center は 1990 年にできた、比較的新しい病院で、癌の患者を主に扱っている。その中で、緩和病棟を見学し、そこで働く医師の話をお聞きした。日本で緩和病棟を見学したことがなかったため比較をすることはできないが、患者に威圧感を与えないように絵や写真が飾られており、工夫されていた。台湾においても緩和医療は癌治療の終末期だけではなく初期から重要視されている。終末期患者は 2 人一部屋で入院スペースが用意されていたが、他の病棟の患者に対しては、患者緩和医療のスタッフは行って診察していた。また、Cancer Center は台湾で働く医師や看護師の話聞く貴重な時間だった。主に、台湾の保険制度、医者や看護師の働き方やキャリアに関することを学ぶことができた。

TFRD

TFRD は難病や珍しい病気の子供やその家族の支援を行う台湾の NGO である。事務所に
行って、NGO の方針や業績を聞いた。主に行う業務は病気の患者同士をつなげ合わせたり、
家族のためのイベントを用意したりすることです。世界でも数例しかいない病気の子
供を扱うこともあり、簡単に解決できないことに取り組んでいました。ただ、難病の子供
の親の苦労は多大なるもので、このような団体の意義は大きいと、話を聞いて思った。

Lab

Chen 先生の研究室に見学に行った。ネズミの脳を顕微鏡を使い生きたまま観察する研究
をしている。研究室にも行かせてもらったが、基本的には日本の研究室と大きな差は感じ
られなかった。ただ、動物愛護や遺伝子に関する規制は日本と同じで厳しく、アメリカや
欧米諸国ほど自由に研究はできないようであることがわかった。

PBL

PBL は症例をディスカッションし勉強するときに使う手法の一つである。先生が症例を持
ってきて、それについて自宅で調べてくる。人グループになった学生が、それについてデ
ィスカッションしていく方式である。陽明大学では週に 2 回も行われており、全国的にも
広く取り入れられた方法である。日本の学生は勉強会を行うが、台湾のように体系立てて
授業で取り扱うことはない。また、評価の対象になるため、すべての生徒が意見を述べる
し復習もする。アウトプットをする良い機会になると思われる。

3. まとめ

全体を通して、台湾の教育システムについて日本と比較してみた。以前までは 7 年制だっ
たのが、数年前に 6 年制に変わり、教養科目や基礎、臨床などの学習は日本に近い。た
だ、使われる教科書はすべて英語で書かれており、授業では教科書に出てくる英単語の解
説に時間を割いている。そのためか、全体的に台湾の学生の英会話能力は高く感じられ
た。また、海外の医師と話をするとき、ある程度の医学英語の必要性を感じた。日本の
医学教育しか知らない状態であると、客観的に自分たちの立ち位置を図ることができな
いと思う。今回の実習を通して、自分のこれからの学習において必要な事柄が明確になっ
てきたと思う。

平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部 医学科 4年

P. J

日程：

	3月9日	3月10日	3月11日	3月12日	3月13日
午前	日本出発	がんセンター見学	九份見学	十分見学	台湾出発
午後	台湾到着	希少疾患 NGO 見学	黄金博物館	国立故宫博物院見学	日本到着

活動の目的：

本海外活動は、日本以外のアジアの国において、医学教育がどのように行われているかを知り、その国の医療制度や医学研究の現状を学ぶことを目的とします。また、他国の医学生との交流を通じて、より国際的な視野を身につけることが期待されます。

内容：

台北到着当日は、国立陽明大学医学部キャンパスを案内してもらい、学生会館にて歓迎会が行われました。台湾料理を囲みながら学生同士の自己紹介をして、お互いの伝統文化を紹介し合いました。我々、阪大の学生はパワーポイントを用いて、京都・奈良の文化遺産や阪大医学部のある吹田キャンパスを紹介しました。

2日目には、陽明大学医学部の関連病院である Sun Yat-Sen Cancer Center を訪問しました。そこでは、緩和医療部のドクターで、がんセンターの学生教育を担当している Dr. Wan にがん患者の緩和ケアについて話していただきました。また、がんセンターの緩和医療病棟で働く医師 Dr. Chen に病棟を案内してもらい、本人が小児腫瘍内科から緩和医療に進んだ経緯、緩和医療に携わる医師としてのやりがいなどについて話を聞かせていただきました。病院以外にも、Taiwan Foundation for Rare Disorders と呼ばれる NGO を訪問しました。この NGO は、ハンチントン病や Nieman-Pick 病、Wilson 病、蓄積病などの希少疾患を対象に様々な活動を行なっています。ここでは、NGO による啓蒙活動、新生児スクリーニング対象疾患の拡大、治療費の補助などの活動について学びました。3日目と4日目は、19世紀の日本統治時代に金の採掘で栄えた九份や金瓜石金鉱山の記念館である黄金博物館で当時の歴史に学びました。また、台北市内に戻り、国立故宫博物院の代表的な所蔵品の翠玉白菜を閲覧しました。

成果：

大阪大学からは6人の学生が台湾を訪問したのに対して、30人以上の陽明大学

の学生たちが歓迎・案内をしてくれました。そのおかげで、多くの台湾の医学生たちと交流し、普段の大学生活や医学教育のことなどを聞くことができました。台湾の医学部は日本と同じ六年制で、最初の2年間は主に教養科目を履修し、3・4年生で専門科目の講義、そして、5・6年生で臨床実習を行います。また、国家試験などに関しても、日本の医学部と同じく、五年生の臨床実習が始まる前に共通試験があり、六年生の終わりに医師国家試験があるそうです。

陽明大学では、三年生から **Problem-based learning (PBL)** と呼ばれる小グループでの症例検討セミナーが始まるそうです。各グループを大学病院の臨床医が一人ずつ担当して、症例検討会を行い、分からない点を学生たちで分担して調べて、次回の症例検討の際に発表し、次の症例に移るといった方式で行っていました。学生たちは **PBL** を通して論文検索や症例発表の練習を行い、講義で学んだ知識を実践的な形で身につけるそうです。**PBL** のようなインタラクティブな学習を大阪大学も取り入れたら良いと思いました。

また、台湾では講義は中国語で行うものの、すべての科目で英語の教科書を使って勉強しています。英語に触れる機会が日本の学生より多いためか、英語教育が始まるのは日本と同じであるにもかかわらず、台湾の学生たちの英語は日本の学生たちと比べられないくらい上手でした。英語力だけでなく、台湾の学生たちは留学やボランティア活動で海外へ行くことにとっても積極的でした。近年の日本の学生たちは内向き志向で、あまり海外に行かなくなったことに危機感を感じるべきだと思いました。

Sun Yat-Sen Cancer Center は移転して間もない、とても綺麗な施設でした。患者への配慮が、受付や診察室、検査室の設計に表れていて、外来受診がスムーズに行われているようでした。今回、訪問した緩和医療ユニットにも、患者家族の過ごせるスペースが複数設けられていました。**Dr. Wan** と **Dr. Chen** とのディスカッションで末期がん患者の緩和医療について学ぶことができました。台湾で行われている緩和ケアは日本のものと似ており、がんなどの治療困難な疾患が診断された時から開始し、疾患が進行するにつれて、治療と緩和ケアで後者の割合が大きくなるようになっていました。他の診療科が病気を治したり、健康を維持したりする中で、緩和医療の医師にとってのやりがいは何かと質問したところ、"良き死 (**good death**)" に携われることと言われました。"良き死 (**good death**)" とは、患者本人が苦痛のない死を迎えるだけでなく、患者家族もその死を穏やかに受け入れるような死であると説明していました。世界で最も早く高齢社会となった日本は、十数年後に多くの死を迎えることになると言われていました。そのような状況で、緩和医療に携わる医師の役割はより重要性を増すのだろうと感じました。

今後の抱負：

国立陽明大学の学生たちとの交流で、まず感じたのは彼らの語学力の高さでした。ほとんどの学生が英語に堪能で、中には流暢な日本語を話す学生もいました。さらに、台湾の学生たちは海外に行くことにとっても積極的で、夏休みなどの長期休暇を利用し

て、インドやモンゴルで医療ボランティアに参加したり、ギリシャで研究活動に参加したり、カナダに語学留学に行ったりしていました。私は、日本の医学部で教育を受ける居心地の良さに甘えず、常に日本の外にも目を向けて勉強に励むべきであると感じました。医師としてグローバルな環境で活躍するためには、日常会話だけでなく専門分野における英語力を身につける必要があります。これから5回生の臨床実習に臨むにあたり、専門用語は英語もセットで学習することを心がけようと思いました。

謝辞：

今回の海外活動は岸本国際交流奨学金により実現しました。他国の医学部や医療施設を訪問し、医学生たちと交流することは視野を広めてくれるは貴重な経験です。最後になりましたが、岸本忠三先生と奨学金採択の関係者の方々に感謝の意をお伝えします。

今回は岸本基金海外留学奨学金に採用していただき、本当にありがとうございました。

この留学では AMSEP の交換留学プログラムを利用し、台湾の学生と交流することと台湾の文化や医学教育について触れたり知ることを目的に台湾の国立陽明大学に研修に行ってきました。

台湾の医学教育で最も印象に残っているのは、PBL(Problem-Based Learning)形式の授業です。カナダで開発され、台湾では国立陽明大学が一番最初に採用した授業法で、各国の多くの大学で採用されています。医学向きの授業法と考えられており、学生が習ったことを能動的にアウトプットしていくことができます。PBL では教師はほとんど何もせず、時々助言する程度です。一方で学生は、司会や書記などを行い、さらに能動的に疑問点や意見を述べていくことが求められます。学生同士の議論によって本題から派生した全く新しい議論が生まれ、新たな視点が追加されていく点が非常に面白かったです。陽明大学では週 2 回の PBL 授業が組み込まれており、その時生理学や生化学で習っていることを中心に様々な知識をアウトプットできるようにカリキュラムが組まれています。陽明大学ではこれ以外にも、医学を扱った映画やドラマを見ながら意見を出し合う授業があるなど、大阪大学よりも学生を主体としたアクティブラーニングが重視されていると思いました。

また台湾の学生との交流では、平日の夜などに台北周辺の散策をした他、土日を利用して九份・十分の観光をしました。台北周辺では夜市をいくつか回ったり、台北 101 などに行きました。中でも印象に残ったのは、故宮博物院での展示と二二八運動記念館です。故宮博物院には中華民国以前の様々な年代の美術品が展示されていて、そのスケールの大きさに圧倒されました。また二二八記念館には台湾の近代の歴史を示す様々なものが展示されていました。主に繁体字で書かれていて説明があまり読めなかったにも関わらず、台湾のこれまでの歴史をもっと知りたいと思うようなインパクトのある展示でした。本当に様々なバックグラウンドを持つ人と仲良くなりたいのであれば、歴史をきちんと学んでいかなければならないと強く思いました。

台湾での研修を通じて、自己の医学教育を客観的に見直すことができました。また自己の英語能力の低さを直視することができ、もっと勉強しなければならないと実感できたので、とても良い研修だったと思います。今後は、PBL を中心とした勉強を勉強会で行えないか考えるとともに、英語の勉強を進めていこうと思います。

平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 4年

S. S

〈目的〉

私は大学で四年間医学について学んできたが、主に国内の医療についてであった。その中で海外の医療事情について興味を持っていたところ今回このような機会に恵まれ、この留学プログラムに参加することにした。台湾は同じアジアの島国ではあるが、医療的な視点のみならず、文化的な視点からも日本と比較し、それにより視野を広げることを目的とした。

また台湾滞在中は、国立陽明大学医学部の学生に案内をしてもらうということもあり、同年代の海外の医学生との交流も目的とした。

〈内容と成果〉

① 医療施設見学

Koo Foundation Sun Yat-Sen Cancer Center(KF-SYSCC)を訪問した。当病院では患者中心のかつ根拠に基づく (Evidence-Based) がん治療のモデルを提供することを理念としている。

まず、患者への配慮に驚かされた。特に女性患者への配慮として、マンモグラフィ等の為に検査着を着た患者が、診察室と検査室の移動中に他の患者や家族に接触しないように女性専用の検査室と診察室が同じ部屋に設置されており、更に看護師による問診も待合室ではなく中の部屋で行われていた。私はまだ日本国内の病院を多く回った訳ではないが、このような設備は初めて知った。

次に緩和病棟を見学した。この病棟は在宅治療中の患者が化学療法や放射線治療の為に通院するに際してなるべく憂鬱な気分にならないようにという理由で、壁に患者や職員の願い事を書いて飾った装飾や絵画などがあった。その他に、入院する患者の家族が患者と落ち着いた時間を過ごすことができるよう配慮された家のような部屋や、寝たきりの患者が入浴出来る設備もあった。見学することはできなかったが、死期が迫った際に移される部屋もあり、各患者に応じた宗教等の配慮がなされているという。

② NGO 訪問

Taiwan Foundation For Rare Disorders (TFRD) という NGO 団体を訪問した。この NGO は 1999 年に設立され、以来、希少疾病患者を治療・教育・雇用の面で支援

し、加えてこのような希少疾病の周知活動をしている。具体的には、希少疾病患者が適切な医療やリハビリを受けられるための支援、希少疾病用医薬品や特別な栄養食の確保、希少疾病患者の教育、雇用、長期介護ケア等のニーズに応えることが主な活動内容である。希少疾病患者の代表として、患者の権利を確立し、疾病研究を促進し、世間に周知させる為の法律の整備を主張している。

また、レシートを使った寄付の方法が印象的だった。台湾のレシートには“宝くじ”が付いている為、レシートを寄付することが出来るのだという。

③ 研究室見学

陽明大学の Dr.Chen の研究室を見学させて頂いた。生きたマウスの海馬の神経細胞の活動を Ca 濃度を利用したイメージングで可視化し、高性能光学顕微鏡で神経細胞のネットワークを即座に検知する、という概要であった。マウスの脳の細胞を可視化するという概念は昨年の阪大での機能系実習で見学していた為、理解し易かった。

マウスが自由に動き回ることのできる空間の中にある物体を置き、その物体の場所を記憶する際の、海馬の特定の神経細胞を観察する。しかしイメージングにおいてマウス（光学顕微鏡の対象物）は静止している必要がある為、マウスは固定され、マウスが走ると床の方が動くような構造になっていた。

この実験で利用している二光子励起顕微鏡で海馬を観察する為には、マウスの頭蓋骨や大脳皮質を取り除いてカバーガラスを置く必要があり、現在はそのような切除の必要無い顕微鏡の開発にも取り組んでいるそうだ。もし実用化されれば脳外科の侵襲的な手術に先立って脳の領域の機能を確認できるのではないかと、という。更に、Ca 濃度を利用した検知原理も神経細胞の活動を正確に同時に反映しているとは言えず、その欠点を克服するような他の方法を探すこともこれからの課題の一つである。

④ Medical Theater

Medical Theater では、医療に関する映画を鑑賞し、陽明大学の学生とその内容について議論した。日本の医療ドラマ一つと洋画を二つそれぞれ抜粋して鑑賞した後、台湾におけるインフォームドコンセントの概念やヘルシンキ宣言を参照しつつ、映画での描写がそれらに則っていたかについて意見を交わした。

⑤ Panel Discussion

1. 教育制度について

台湾と日本の教育制度について陽明大学の学生と互いに自国の制度を紹介しつつ比較した。台湾では日本のセンター試験に相当する GSAT (General Scholastic Ability Test 大学学科能力試験) を 1~2 月に受け、その後 3~4 月に大学毎の試験を受ける。大学の新年度は 9 月に始まる為、進学大学が決定した後も高校に通う必

要がある。

2. 長期介護ケアについて

台湾は世界一のスピードで高齢化が進んでいる。そのような背景において長期介護ケア (Long Term Care) について陽明大学の学生と議論をした。3つの具体的なケースを例に取り、マンパワー・予算・家族構成・各患者の必要とする支援の種類を考慮して、Institution Care(Nursing home, Hospice, Day care center), Home care(Care givers) の内、どの制度を利用すべきか意見を交わした。

⑥ PBL

PBL(Problem Based Learning) とは課題 (症例) に基づく学習アプローチを意味する。陽明大学では3年生から4年生の二年間、週二回英語で行われている。PBLは8名程の学生とチューター (担当教員) 1人から成る小グループで進められ、通常は、疾患を持った患者と診断・治療を行う医師が登場する acts(脚本、台本)が用いられる。学生達はチューターの助言を得ながら、問題解決に必要な知識を活用してその疾患に隠れる生理的、病理的メカニズムを解明することが求められている。

初回の PBL では症例の中の鍵となる要素を列挙し、それらから推測されるさまざまな問題点を討論により抽出し、仮説を立てる。次回の PBL までに、抽出された項目について各自が自己学習をして準備をし、2回目の PBL でその仮説を検討する。その後、その症例の症状・メカニズムについてフローチャートにまとめる。

PBL という学習方法はこれまで私は聞いたことがなかったが、系統的な学習方法と比べて、臨床における診断能力をより養うことが出来るように思う。台湾の医学部では比較的一般的な方法であるが、特に陽明大学の PBL は週に二回と頻繁に行われる上、他大学から参考にしようと見学に来ることが多いそうだ。

〈今後の抱負〉

私は今回初めて海外の医学生と交流をしたが、日本との違いに驚いた。台湾は日本と同じアジアの島国ではあるが、陽明の学生から感じられる雰囲気は日本のそれとは全く違っていた。とても初歩的な感想にはなるが、全員英語を話すことはもちろん、台湾以外の国の文化や事情に詳しい学生が多かった。そして授業においても英語の教科書を使うためか、日本人学生 (或いは私自身) ほど海外に対して感じる障壁が低いように感じられた。ある一人の学生が「私達は out going に行こうと心がけている」と言うのを聞いて、私は今までの自分の視野の狭さを実感させられた。

私は今回の留学を通して、これまでより海外に目を向けたいと思うようになった。そして具体的には、5年次の選択実習で今回の経験を活かして是非とも海外実習に行くことが出来るよう努力したいと思う。

〈日程〉

	3/9	3/10	3/11	3/12
Morning	Arrival	Hospital Visiting	Jiufen Trip	
Afternoon	Campus Tour	NGO		
Night	Welcome Party	Gongguan, Ximending		
	3/13	3/14	3/15	3/16
Morning	Lab	MRT trip	Panel Discussion	Return to Japan
Afternoon	Medical Theater		PBL	
Night	Shilin Night Market		Farewell party	